

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 The Preservation of Javanese Identity: A Study of Javanese Language Attitudes and Utilization

申請者氏名 DEWI PANGESTU SAID

Indonesia has adopted the “Bhinneka Tunggal Ika” concept to unite various ethnicities. The nation’s formation is unique due to the inclusion of existing tribes. Group identities can change, strengthen, fade, or multiply during the process. Indonesian society identifies itself on two levels: as part of the state and as part of indigenous communities. During the nationalist movement in Indonesia, the Indonesian people developed a new identity by prioritizing similarities in language and ideology. This new identity is based on the idea of an Indonesian nation that transcends ethnic and linguistic differences while still recognizing and celebrating the unique cultural diversity of its constituent groups. Thus, Indonesia’s identity as a nation is a continuous process that develops and changes over time.

Linguists have studied the relationship between national and local languages in Indonesia. Their findings suggest that while some studies focus on the unifying role of the national language, others highlight the importance of the diverse ethnic languages spoken across the country. The coexistence of these languages depends on community culture and communication patterns. The relationship between national and local languages in Indonesia is complex. While Indonesian is the official language, local languages such as Javanese are still widely used and taught. The government has implemented regulations and plans to protect both languages. However, efforts to strengthen Indonesia may inadvertently affect the preservation of Javanese. Therefore, it is necessary to analyze the current state of the Javanese language, particularly its function as an identity for the Javanese people.

Based on those statements, the study aims to assess whether the Javanese language is being adequately preserved or if there is room for improvement. The following sub-statements will be investigated to achieve the primary research objective: the current attitude towards the Javanese language, the current use of the Javanese language, and the present Javanese identity.

Linguists belonging to Javanese culture have established a set of guidelines for the use of Javanese speech levels. While there are different classifications, Sudaryanto (1989) and Ekowardono et al. (1993) have formulated the most suitable procedures for practical use. These guidelines are simple, relevant to contemporary Javanese communication, and widely accepted. The researchers used these guidelines to analyze the use of Javanese by the participants in their study.

A variety of data collection methods have been employed in this study, including questionnaires, interviews, and recorded conversations. The findings from the questionnaires and interviews reveal that participants hold a positive attitude towards the Javanese language, demonstrating strong loyalty, pride, and an awareness of linguistic norms. However, there is a notable discrepancy between their perceived proficiency and actual usage, suggesting a gap between their beliefs and their practical language skills. The discussion explores the evolving ways in which

participants utilize Javanese, highlighting a gradual shift away from standard Javanese. This trend raises concerns about the preservation of the language, suggesting that proactive measures must be taken to safeguard its continued vitality and use.

Thus, this study provides a valuable report on the current state of the Javanese language and establishes a foundation for further research to address the identified challenges. It underscores the importance of focusing on preservation strategies that promote appreciation and correct usage of the Javanese language, ensuring its survival for future generations. An additional study focused on protecting the Javanese language, especially through education, is needed to build on the foundation established by this study.

Keywords: attitude, identity, Indonesia, Javanese, language, nation, language usage.

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 181 号	氏 名	DEWI PANGESTU SAID
論文題目	The Preservation of Javanese Identity: A Study of Javanese Language Attitudes and Utilization ジャワ人としての自己認識の維持：ジャワ語の捉え方および使用に関する研究		
<p>(論文審査概要)</p> <p>本論文はインドネシアのジャワ文化圏におけるジャワ語使用の状況とジャワのアイデンティティに焦点を当てた研究である。インドネシアは建国時に「多様性の中の統一」を掲げ、言語においても国語であるインドネシア語と各地方のローカル言語の両方が併存してこそのインドネシアであるとしてきた。しかし、半世紀以上を経た現在、これらの言語のおかれた状況は変化しつつあると考えられる。この論文では、現代におけるジャワ語の使用が、必ずしも従来のガイドラインで正しいとされてきたジャワ語の用法通りではないこと、しかしそのようなジャワ語を話すジャワ社会の人々自身は、自分たちは相手に対する礼儀や敬意を表現するジャワ語を話しているという自己認識と、ジャワ語に対する誇りをもっていることを、質問紙調査とインタビュー調査によって明らかにした実証的な研究である。</p> <p>第一章では、研究の背景として、インドネシアという近代国家が、旧オランダ植民地の各民族集団が統合することによって形成され、そのため独立当初から、インドネシア国民としての意識をもつことと各地方文化を維持することが国民統合の両輪とされてきたことを述べたのち、半世紀という時間と近年のグローバル化が、これらのバランスに何らかの変化を与えているのではないかという、問題提起をしている。</p> <p>第二章では、インドネシアが領土、法体系、国民をもつ国家であることを述べたうえで、国家と国民、言語とアイデンティティの関係に関する先行研究を検討し、ナショナリズムとソーシャルアイデンティフィケーションを論文の鍵となる概念として導き出している。</p> <p>第三章は、インドネシアにおける言語使用、国語であるインドネシア語と各地域のローカル言語、およびそれらがアイデンティティ形成において果たす役割に焦点を当てている。前章で論じた言語とアイデンティティに関する一般的な枠組みのもと、インドネシアのナショナルおよびローカル言語の関係に関する先行研究を概観し、インドネシア文化におけるローカル言語の重要性を述べている。そしてローカル言語の中でも本論文ではジャワ語に焦点を当てて言語とアイデンティティを論じていくとしている。</p> <p>第四章では、先行研究に基づき、現代のジャワ社会で基準とされるジャワ語使用は4つのスピーチレベルに基づくものであると定義し、本論文では、このスピーチレベルの基準から逸脱するジャワ語使用を「誤り」と呼ぶことにしている。</p> <p>第五章では、論文後半で検討する、ジャワ語使用に関する生徒、教師、ジャワ語教育当局職員へのインタビュー、地域コミュニティおよび家族内における会話の録音、生徒および教師に対するアンケートなどの実証データの収集方法について詳述している。</p> <p>第六章では、収集されたデータの分析結果を示している。アンケートの集計結果と録音データの書き起こしを基に、ジャワ語に対する態度に関する情報をテーマ別に整理するとともに、録音されたジャワ語使用における誤りの数を各人ごとに集計し、グラフで示した。</p> <p>第七章は、第六章のデータ分析結果を、第二章、第三章、第四章で述べたキーコンセプトおよび基準とされるジャワ語使用の定義に基づいて考察している。先行研究にもとづい</p>			

て、ジャワ語に対する態度をこの言語への忠誠心、誇り、規範意識の観点から分析し、今日の言語環境においても、調査参加者のジャワ語への肯定的態度が保たれていることが示された。一方、ジャワ語使用に関しては、若者世代においても親世代においても、従来のガイドラインに示されたジャワ語の定義とは異なる使用例が見られ、人によってはかなり高い割合で誤用が見られることを示した。ジャワ語を推進する立場の政府関連機関の職員もジャワ語ではなくインドネシア語で答えるなど、多くの調査協力者のジャワ語への肯定的態度と実際のジャワ語使用状況の間に乖離が見られた。

第八章は本研究の結論と限界、今後の研究課題を述べた章である。ジャワ語使用の状況は従来基準とされてきたガイドラインとは異なっているが、ジャワ語への肯定的態度は保たれていることを述べたのち、限界として、結果を一般化するにはサンプル数が不十分であったこと、サンプルとした生徒と教師が決して社会全体を代表するとはいえないこと、新型コロナウイルス感染症パンデミックによりデータ収集が予定通りに行えなかったことが挙げられている。今後の課題として、より多くかつ多様なサンプルに基づく分析を行い、ジャワ語の維持のために貢献することが述べられている。

1. 創造性

言語とアイデンティティやジャワ語の基準などに関する従来の説を理解したうえで、現在のジャワ語使用の状況とジャワ語に対する態度についての仮説のもと、それを証明するために、ジャワ語教師ならではの知識とスキルを生かしたデータ収集と分析を行った。ジャワ語を母語とする専門家によるこのような研究はほとんどなく、本研究がジャワ語およびジャワ社会研究分野に貢献することは明らかであり、創造性については極めて優れている。

2. 論理性

予備審査で指摘のあった実証データの分析結果に基づくジャワ語使用の実態とジャワ語に対する態度の解釈の齟齬に関して、本審査では適正に仮説の修正がなされており、論理性の点においては優れている。

3. 厳格性

先行研究については、本研究が複数の学術領域にまたがるものでもあり、すべてを涉猟咀嚼しているとは言えないが、本研究の核となる部分に関しては適切なレビューがなされており、達成できているといえる。

4. 発展性

コロナ禍下でのデータ収集となったため、意図したとおりに行えなかった面がある。より多くのデータを得ることによって、より一般化に近づくことができると考えられる。また、学校におけるジャワ語教育改善に向けた研究への発展も期待できる。よって、発展性の点においては極めて優れている。

以上から、審査委員会における審査委員の合議によって論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

合・否

審査委員 主 査 (氏 名) 石井 由理

(氏 名) 高橋 俊章

(氏 名) 鷹岡 亮

(氏 名) 山本 牙里

(氏 名) _____